

大祓詞

たかまのはら かむつまりま 高天原に神留坐す すめら 皇が親神漏岐 かむるみのみこと 漏美命もちて
やおよろずのかみたち かむつと 八百萬神等を神集え集え賜い たま 神議りに議り賜いて 我が
すめみまのみこと とよあしはらみずほのくに 皇御孫命は豊葦原瑞穂國を安國と平らけく知めせと ことよ 事依
さし奉りき まつ かく依さし奉りし國中に くぬち 荒振る神等をば かむ 神問
はしに問はし賜い かむはら 神掃いに掃い賜ひて ことと 語問ひし磐根樹根立草
かきは の片葉をも語止めて あめ 天の磐座放ち やえぐも 天の八重雲を いず 伊頭の
ちわき 千別きに千別きて あまくだ 天降し依さし奉りき まつ かく依さし奉りし
よも 四方の國中と おおやまとひたかみのくに 大倭日高見國を安國と定め奉りて しも 下つ磐根に
みやばしらふとしき 宮柱太敷き立て たかまのはら 高天原に千木高知りて すめみまのみこと 皇御孫命の瑞の御
あらかつか 殿仕へ奉りて あめ 天の御蔭日の御蔭と隠りまして やすくに 安國と平けく
知ろしめさん國中に くぬち 成り出でん天の益人等が あめ 過ち犯しけん
くさぐさ 種種の罪事は あま 天つ罪 くに 國つ罪 ここたく 許許太久の罪出でん い かく出で
あま ば みやごと 天つ宮事もて おおなかとみ 大中臣 かなぎ 天つ金木を本打ち切り すえう 末打ち断
ちくら ちて おさくら 千座の置座に置き足わして あま 天つ菅麻を もとかり 本刈り断ち
すえかり 末刈り切りて やはり 八針に取辟きて あま 天つ祝詞の太祝詞を宣れ
の かく宣らば あま 天つ神は天の磐門を押しひらきて あめ 天の八重雲を

伊頭いずの千別ちわききに千別ちわききて 聞きこしめさん 國くにつ神かみは 高山たかやまの末すえ

短山ひきやまの末のほに上のぼりまして 高山たかやまの伊い穂理ほり 短山ひきやまの伊い穂理ほりを 搔かき

別わかけて聞きこしめさん かく聞きこしめしては皇御孫命すめみまのみことの朝廷みかどを始はじ

めて 天下あめのした四方よもの國くにには 罪つみと言う罪つみはあらしと 科戸しなどの風あめの天あめ

の八重雲やえぐもを吹ふき放はなつことのごとく 朝あしたの御霧みぎり夕ゆうの御霧みぎりを 朝風あさかせ

夕風ゆうかせの吹掃ふきはらうことのごとく 大津おおつべ辺べにおる大船おおぶねを 舳へ解放とち 舳と

解放とちて 大海おおわたの原はらに押放おしはなつことのごとく 遠方おちかたの繁木しげきが本もとを

焼鎌やきがまの敏鎌とがま以もて 打掃うちはらうことのごとく 遺のこる罪つみはあらしと 祓はらい

給たまい清きよめ給たまうことを 高山たかやまの末すえ 短山ひきやまの末すえより 佐久那太理さくなだりに落お

ちたぎつ 速川はやかわの瀬せにます瀬織津比賣せおりつひめと言う神かみ 大海おおわたの原はらに持も

ち出いでなん かく持もち出いでいなば 荒潮あらしおの潮しおの八百道やおじの八潮道やしおじ

潮うしほの八百會やおあいにます速開都比賣はやあきつひめという神かみ 持もち加加吞かかみてん 加

く加加吞かかみてば 氣吹戸いぶきどにます氣吹戸主いぶきどぬしという神かみ 根ねの國くに底そこの

國くにに氣吹いぶきき放はなちてん かく氣吹いぶきき放はなちてば 根ねの國くに 底そこの國くににま

す速佐須良比賣はやさすらひめという神かみ 持もちさすらい失ういてん かく失ういてば

天あめの下四方よもには 罪つみという罪つみはあらしと 祓はらい給たまい清きよめ給たまうこと

を 天あまつ神かみ 國くにつ神かみ 八百萬神やおよるずのかみたち 平たいらけく安やすけく聞きこしめせ

ともうす